

あしき事也、伽羅を入れて吞し人に、健忘の症を煩ひ、死なざる人あらずと云事なし、さのみ是計は好色にもならぬことなれば、さりとはいらぬ事也。

〔ひとりね<sup>上</sup>〕たばこのむに、輪をいくつとなく吹く人あり、壁に針を打て、それに輪をかける人あり、はじめ一つ吹出して、其内をまた吹様に、ちいさく輪を吹人有、或は又けむりを外へ出さず、ことごとく内へ吞て、ほのく<sup>く</sup>とあかしの浦の朝霧にと、一首よみしまいて、けむりを出す人有、今のごとく引て鼻の元より出す人有、女郎様などの、鼻の穴より吹出し給はんは、いまり焼の香爐の如く、見苦しななどはおろかの事なり、けふもさめはてぬべし。<sup>略</sup>中余はきらひにて、たばこのむことならねども、人の吞をいとふにしはあらぬに、人によりて手まへの嫌ひなれば、人の吞もいとふ生れ有、やまひといへども心つくべし、心つくれば其儘なをるもの也、我ま、よりおこることなり。

〔閑田次筆<sup>四</sup>〕黄檗開祖隱元禪師は、煙草を惡み給ふこと甚し、其偈にいはいはく、一管狼烟吞復吐、恰如炎口鬼神身、當年鹿苑有此草、不説五辛説六辛、此偈語録には洩たるよしなり、昔彼宗徒に聞しが、遺亡せしを、又此比一和尚語られき、座禪看經の勤を空しくせるを惡み給ふならん、されば此物と飲酒は、彼僧衆凡て不喫ことなりしが、當時は不喫人は數ふる計也とぞ。

〔蕎録<sup>下</sup>追譯增補〕吹煙戲曲説

烟草之盛行于世也久矣、其極至有吹烟爲戲曲者、元祿年間、有貓莊兵衛者<sup>略</sup>中、都下近有幫間吉藏者、兼爲此戲云、余未見之、頃亦城西有一狎客、好善此戲、其技最奇、自號輪玉亭吹烟<sup>俗稱</sup>、<sup>轍源</sup>茂質<sup>概</sup>。大一夜、在一友人宅親視之、其人暗處設坐、煙盆煙具在其側、戲曲數番、先向諸客告其曲名、把管裝烟、點火仰噴之、則坐上一推之雲、雲中忽爲輪、或圓或楕、推頰扣頰、大小綿連迸出、或爲連環、或爲連珠、或握扇貫其所噴之輪、或一或二三、或令輪在扇上、或吹入於一管中、管尾噴出數輪、或吹已懷中、則自其袖